

# 待望の高虎文書の集大成

三重大学教授 藤田達生

藤堂高虎(一五五六―一六三〇年)は、江戸時代を代表する名築城家として有名である。しかし外様大名でありながら幕閣並の実力者で、極言すると「家康に天下を取らせた智将」と言ってもよいほどの重要人物であるにも関わらず、あまり注目されることはなかった。その最大の理由は、関係史料の蒐集が遅れていたことにある。

このたび上野市古文献刊行会の監修により、昨年逝去された伊賀史研究の重鎮・故久保文武氏の遺稿をもとに、大著『藤堂高虎文書の研究』(以下、本書と記す)が刊行される。

高虎関係史料については、近年『三重県史 資料編近世編Ⅰ』でまとめられているが、本書には新たな史料が追加されたばかりか、既に知られている史料についても、解説や年次比定などで新たな知見が加えられ、久保氏のきめ細やかな「註解」や「考証」まで付されている。まさに本書は、高虎関係史料集成の決定版といえるであろう。

本書の注目すべき点は多岐にわたるが、私の関心から二点のみご紹介したい。まず久保氏ならではのと言えるのが、高虎の花押・印判の類型と、数少ない直筆史料を明らかにされたことである。花押・印判については適宜写真を挿入しているし、直筆に特有で花押と見間違える「恐懼」のくずしを解説されたことは、さすがというほかない。

内容的には、慶長十四年(一六〇九)の駿府藤堂屋敷の普請と元和六年(一六二〇)の徳川大坂城の築城に関わる史料群によって、それぞれの実態がより一層明らかになったことを指摘したい。

駿府屋敷には、漆塗りや金箔が施された豪華な建物群が建ち並んでいたこと、大坂城の石垣については、角石をはじめとする大振りなものは山城国加茂村(京都府加茂町)や小豆島から、大石の隙間を埋める栗石は和泉国淡輪(大阪府岬町)から切り出されたことなどがわかる。

藤堂藩(藩庁津城・三十二万石)では、藩祖高虎を顕彰すべく『宗国史』『公室年譜略』『聿脩録』『高山公実録』などの精度の高い藩史が編纂されている。これらは、上野市古文献刊行会の皆さんの長年にわたるご研鑽によって、翻刻され出版されてきた。

本書の刊行をもって、高虎や初期藤堂藩の基本的史料は揃ったことになる。これによって、近世初期の政治史研究が飛躍的に高まることは間違いないであろう。